

ミシガンメソッドと高校英語

伊 藤 俊 一

近年 Oral Approach の名のもとに、英語への入門期の教授法として、ミシガン大学英語研究所の Fries 博士らの提唱になる方法が、問題となっている。昭和33年7月、国際キリスト教大学でフルブライト委員会主催、文部省後援で行われたセミナーには Fries 博士の協力者であり、現所長である Lado 博士が指導にあたって、全国的に中学校英語教師が参集し、その方法を研究し、又発音、intonation の訓練に2週間を過した。そのとき博士に色々質疑を行うことが出来たが、その概略を追いながら、高校に於ける英語教授に、どのような応用が出来るか、等の問題を考えていきたい。

1) Oral Approach

逐語的あるいは、表現の単位としての句をおって訳していくという方法がよく外国語教授に用いられている。これは最も安易なやり方で、たしかに近道ではある。しかし言語の本質を考えた場合これは決して満足すべき方法ではない。何故なら外国語を習得するという事は、ただ単に母国語に置き換えることを意味しないからである。その外国語を自由に読み、書き、話せてこそはじめて充分に使いこなせたといえるのだ。各国語に特有の語順があり、音素あり、文法的約束あり、又文化的背景があるのである。特に入門期に於て Grammar-Translation method をとることは、英語の句型を運用していくに必要な言語感覚を得られなくしてしまう。つまり英語に特有な speech habit が修得出来ない。

又一方の極端にあるものとしては、会話をを用いる方法 (Conversational method) なるものがある。決してこの方法は誤ったものではなく、一つの有効な方法なのであるが、これだけでは満足すべきものとはならない。未習の単語が難易を無視して使われることがしばしばであるし、しっかり体系だっていない順序で speech habit が多く入って来るため、入門期には混乱を招くおそれがある。それに重要な problem pattern を集中的に drill することができない。一応 Pattern が確立してからの方法としては有効なものとなる。

ここにいう Oral Approach が method という語を使わないのは、“How to teach?” よりむしろ “What to teach?” に重点を置くからである。すなわち、言語学的分析にもとずいて、難易によって順序よく並べられた material を、すなわち種々の established habits of patterns を、実際に口を開かせ、耳を働かせ、眼を使わせて生徒の心の中にたたき込むのである。しっかりとした言語習慣を身につけさせるのである。これがしっかり身につけていないと、受験英語で、相当難かしい英文を一応読んではいても、英語を応用していく能力に欠けて来るのであり、或程度までは進歩しても、決して将来伸びないのである。話す能力、聞く能力は言わずもがな、読書能力もある壁にぶつかってそれから先へは進歩しないのではなからうか。

集中的な drill に於てはとくに、problem pattern を重視する。これは学習者の母国語が異なるに従って異なるものである。例えばスペイン語を母国語とする学生にとっては何等抵

抗なく受け入れられる文型も、日本人にとっては仲々習得しにくいものがあるし、この逆も考えられる。

2) 言語学と外国語教授

Sapir の名著 'Language' にもあるように、各国語はそれ独自の sound pattern があって、それが一定の habit によって組合わさって大きな system をつくりあげている。その組合せの habit が grammar pattern である。又語いにしても、単に外国語の単語を母国語に置き換えただけではそれぞれの語が各国語内で持つずれにより、誤訳のもととなる。高校でリーダーの訳をする場合でも、context や situation を無視した訳語をつけるものがあるのは、単に辞書に出ている意味をそのまま移したため、自分でも自分の訳の意味がわからないのである。又ことばというものの性質上、文化的背景を無視することは出来ない。たとえば、ある人が自分の描いた画を人に褒められたとする。この situation に於て、米国人なら "Thank you" "It's very kind of you to say so" あるいは "I'm glad you like it" ぐらいに応えるであろうが、日本人なら「いや、おはずかしいもので」とか、「いやとてもとても」とかかって謙遜するであろう。このような場合に word-for-word translation をすると、例の笑い話の主人公のように、客にむかって、"There is nothing to eat but..." (何もございませませんが、どうぞ、たくさん) などと言って外国人を面くらわせることになるのである。

3) 音素学 (Phonemic theory) と発音

各国語には特有の sound がある。そして音声学的に言えば、同じ [k] sound でも cup [kʌp] の [k] と keep [ki:p] の [k] とのごとく、所謂 back [k] と front [k] とがある。併しこの 2 つは意味の変化を生ぜしめるには到らないので音素学的には同じとみなし [k] 表わされる。これに反して beat, bit, bet は夫々 Jones 式に表記すれば [bi:t] [bit] [bet] となるが、子音をそのままにして母音を入れ換えれば意味の変化を生ずる。このため [i:] [i] [e] は音素学的に各々違うものとして扱われる。ここで注意すべきなのは、[i:] と [i] 音とは [i:] を付けることによって、一方が他方より長いことを表わして区別しているが、American English ではこの二つの音の間には単に length の差ではなしに、articulation の上ではっきりとした区別がある。[i:] 音の方が舌の位置が高く、より緊張した口型により発音されるのである。この二者の違いが長さのそれでないことは beat と bit を発音する際 bit の方をゆっくりひきのばして発音し、beat の方を速く、短い時間で発音しても articulation がしっかり区別されていれば意味の混乱はおこさない。従って [i] と [i:] という風に表記するのは妥当ではない。そこで Jones 式の [i:] には [i] をあて、[i] には [I] をあてて区別するべきだとするのである。ここに Jones 式とは別に Special Alphabet を用いるのが妥当なことになる。Special Alphabet と Jones 式とを対照させると次のようになる。

母音	音	子音	音
S.A.	Jones	S.A.	Jones
i	i:	y	j
I	i	š	ʃ
e	ei	z	ʒ

ε	{ε e	č	tʃ
æ	æ	j	dʒ
ə	{Λ ə	次は双方が一致する	
ə(r)	ə:	p, b, f, v, m, w,	
a	{a: a	t, d, n, r, l, k,	
ɔ	{ɔ: ɔ	g, h, s, z, θ, ð,	
o	ou	ʝ	
u	u:		
U	u		
aI	ai		
aU	au		
ɔI	ɔi		

我々日本人が英語を話し、聞くとき、英語を母国語とする人々の言葉が仲々聞きとりにくい、あるいは理解されにくい場合には、そう大した数の困難点があるわけのものではなく、上に表わされたような sounds に対して日本語の sounds をあてはめてしまうからである。例えば母音であるが、英語に使われる11の母音を、5つの母音ア、イ、ウ、エ、オに無理に分類してしまう。従って beat と bit, bet の区別があいまいになり、cold と called, bold と bald 等がみな混乱を来たすのである。

Intonation も意味の理解に重要な役割を果たすものである。次にその一例を挙げてみる。

(I)

A: "I've lost it"
 B: "What?" ↗ (rising intonation)
 A: "I've lost it"

(II)

A: "I've lost it"
 B: "What?" ↘ (falling intonation)
 A: "My book"

(I) (II) 共にはじめのAの発言は同じでありBの質問も単語は同じだが、〔I〕の場合は尻上りに言われるために、はじめのAの発言をききもらした、あるいは意味が充分とりにくかったからもう一遍言ってくれという意味になる。従ってBの質問に対する答えは "I've lost it" となる (II) の場合には「何をなくしたのか」という意味になり従って答は "My book" ということになるのである。

高校に於ける英語教育では、今までどうしても translation に重きが置かれて来たし、最近発音、アクセントに重視されるようになったが、intonation は未だこの感が深い。Fulbright の交換教授や、その他英米人の教師を大いに活用し、又テープレコーダーやL.P. レコードの利用が望ましい。同時に pattern practice による class work をどしどし高校英語にとり入れていったらどうであろうか。勿論日本語による説明はするべきであるが、従来のように、文の理解で満足することなく、そこを出発点として unconscious automatic drill

にまで行くべきである。

発音の教授例を〔i〕音と〔I〕音との区別を問題にして示すと次の順序になる。

- 1) Attention pointer
- 2) Examples
- 3) Inductive comment
- 4) Articulation (Conscious practice)
- 5) Unconscious automatic drill

先ず両者の対照をよく示す最少単位の文章をあげて注意を惹きつける。例えば、

He beat the dog.

He bit the dog.

この一組の文によって母音の差がいかなる意味の差を生ずるかがわかる。そこで更に例をあげる。He heats it. と He hits it.

He leaves alone. と He lives alone. 等々生徒に例をあげさせるのも一法であろう。ここで次の inductive comment に移る。この段階では、絵、図型、などを充分活用して、両者の発音の仕方を説明する。そして chorus で発音させたり、一人一人にやらせたりして、Articulation の練習をつみ、最後にこの音を含む文章を速度をはやめて読むなり、させて、無意識のうちに正しく発音出来るようになるまで drill を行なうのである。

4) Pattern Practice

上にも述べたように、言語を習得せんとする場合、重要なのは、habit を確立することであって、文法的事項を覚えることではない。文法の定義や規則をいくらたくさんつめこんでも、それらが単なる知識として頭にあるだけでは、speech は愚か writing も出来ない。決して文法事項は habit の代りとはならない。この habit を確立するための pattern practice を行なう場合次の三つの点が重視される。

- ① Gradual shift of attention
- ② Variety
- ③ Spacing practice; Intensive drills with intervals.

問題の説明が終り、生徒が今学んでいる文型を理解し、意識的に文の各要素を組み合わせで reproduce 出来たとする。もしそれだけで満足してしまつたら、その生徒がもし日常会話の場でその文型を使おうとしたら必ず型をくずしてしまうか、よく出来てもとぎれとぎれにしか使えないであろう。内容に注意が向けられると文型がくずれ、文型を意識すれば内容が伴わなくなる。これをさける方法は、その文型を無意識的に使えるようになるまで、practice をすることである。即ち unconscious habits を獲得することである。それではどうしたらこの unconscious habits を確立出来るか。単なる文の反復練習、ワークブックによる練習、自由会話等がよく用いられる。併し、反復練習はしないよりはよいが、すぐ退屈してくるため、学習意欲の減退をひき起すし、ワークブックによるものはこの habit の習得には大して役立たない。自由会話によるものはこれらの中では最良と思われるが、文型の表われ方が at random であるし、problem pattern を集中的に訓練することが出来ない。又教師としては絶えず生徒の誤まりを指摘しては自由な会話の流れをとめることになるし、又そうしなければ、誤った語法をそのまま許容しなければならなくなり、その選択に迷うことがしばしばとなる。

Lado 博士の言をかりれば

Pattern practice—completely oral—is presented here as one such technique. It consists paradoxically in the conscious substitution of some element *other than the chief element* being taught so that primary attention is drawn away from it while the entire pattern is repeated. —Robert Lado; Selected Articles from Language Learning

すなわち生徒に他の語を代入させて同一文型を繰返して produce させるようにしむけるのである。生徒を飽きさせることなく、注意を集中させるためには、material や方法に変化を持たせることが望ましく、更に大事なことは、この practice は長時間にわたって行なうよりも集中的な練習を短時間行い、間を置いて次の時間に又10~15分程、行った方がよいのである。

Grammatical structure を教える場合最も考慮すべきことは、先ず problem pattern の決定である。例えば日本語に於ては語順と共に助詞の作用によって Actor-Action-Receiver の関係が示されるが、英語に於ては word-order による。

The man killed the bear.

The bear killed the man.

疑問文を作る場合も、英語では主語と動詞が入れ代り、

He is a farmer.

Is he a farmer?

スペイン語では intonation のみによる。

Es campesino. ↘

¿Es campesino? ↗

日本語では文尾に「か」を付けて疑問の意味を表わしている。

Ohyakusho desu.

Ohyakusho desuka.

上例のように各国語間によって異なる problem を正しく探りあて、学習者の母国語をよく理解した上で正しい科学的な grade に応じて配列された文型が必要なものとなる。

5) 結 び

以上述べた如く、この方法は主として入門期の指導法として効果あるものであり、その日本人によく合った problem pattern の設定配列については ELEC に於て多くの努力がなされているようであり、やがてその Text が発表されると思われる。さて高校の英語教授にどう応用出来るかを考えてみるのに、発音、intonation の練習にはそのまま応用出来るし、grammatical structure の pattern practice については、主に Review の段階で前の時間で理解した文型について集中的な drill が行われれば非常に効果があると思う。又、文法作文の教授にはその応用範囲が非常に大きいのではなからうか。

参考までに高校一年のリーダーを教えるときの応用例として次のことが効果があったようである。前の時間で学んだ部分から適当に problem pattern を5つ程選び、それを生徒に memorize させて来る。それをもとにして、単語を代入して次々と言わせ、簡単な oral composition をやらせる。さらにその文型を用いた作文を次の時間までに作らせる。

この方法は、絵や実物をさして speedy に行ったら時間もそんなにかからず、効果があるのではないと思われる。

次に参考文献をあげてこの稿を終る。

§ Suggested Bibliography

- Language Learning, A journal of applied linguistics,
the Research Club, 1522 Reckham Building,
Ann Arbor, Michigan
- Language Leonard Bloomfield, (New York: Henry Holt and Company, 1933)
- Language Edward Sapir, (New York: Harcourt, Brace and Company, 1921)
- The Structure of English, Charles C. Fries, (New York: Harcourt, Brace and Company,
1951)
- Teaching and Learning English as a Foreign Language
Charles C. Fries, (Ann Arbor: Univ. of Michigan Press, 1945)
- English Pronunciation, The English Language Institute Staff, Univ. of Michigan, Robert
Lado, director.
- Lessons in Vocabulary, same as above
- English Sentence Patterns, same as above
- English Pattern Practices, same as above